

小学校社会科における地域との関わりを見いだす授業づくり（第二年次）

—「未来に伝えたい広野」を考える広野町物語づくりを通して—

長期研究員 松本 哲幸

《研究の要旨》

本研究は、児童が自分たちの地域の現状を基によりよい未来を考えることで、地域社会の一員としての自覚を養うことを目指した。そこで、問いの引き出し方の工夫や他者の立場に立って考えさせる意見交流の設定、学びの変容に気付かせる思考の言語化の手だてをとり、学んだことを広野町物語に表現した。その結果、地域の課題から、自分たちにできることを選択・判断し、学んだことをこれからの社会生活に生かそうとする姿を見ることができた。

I 研究の趣旨

小学校学習指導要領解説社会編において、社会科での思考力、判断力は、「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて、学習したことを基に、社会への関わり方を選択・判断する力である」と示されている。

しかし、平成30年に実施された全国学力・学習状況調査の質問紙調査の本県の結果を見ると、「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることはありますか」に肯定的な回答の割合が52.9%であった。学んだことを基に自分にすべきことを考え、社会生活に生かそうとする態度に課題が見られた。

そこで、本研究では、児童が広野町物語^{※1}づくりを通して、地域との関わりを生み出し、獲得した知識や自分の考え、思いを蓄積する中で、地域のためにできることを選択・判断する場をつくっていく。さらに、自分たちの学びを地域に発信し、地域との関わりを深めていけるようにする。

※1 「地域に伝える、未来に残す」という意識をもって学習に取り組み、学んで分かったことや考えたこと等を記述し、累積したものの。

II 研究の概要

1 研究仮説

小学校社会科において、以下の手だてを講じれば、地域の課題を把握し、その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断できる児童を育成することができるであろう。

【手だて1】地域と関わる必要感のある問いの引き出し方の工夫

【手だて2】地域の社会的事象を多角的にとらえさせる意見交流

【手だて3】地域への思いを込めた広野町物語づくり

2 研究の内容

広野町物語づくりを中心とした単元を構想し、授業を展開した（図1）。

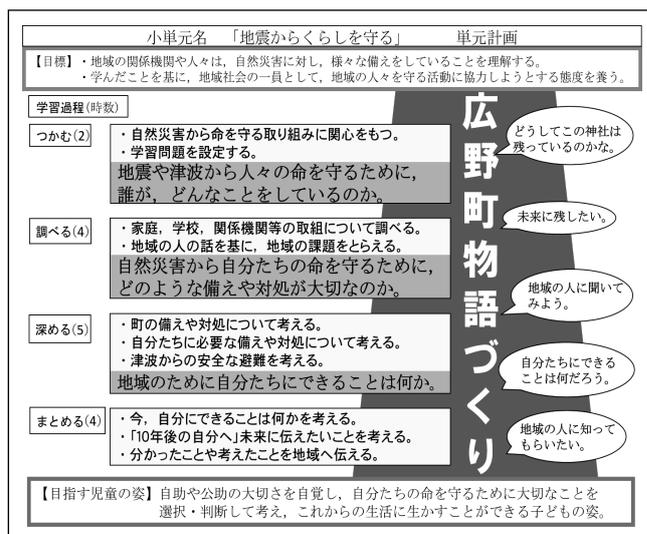


図1 単元構想図

(1) 【手だて1】地域と関わる必要感のある問いの引き出し方の工夫

本研究における問いとは、「調べたり考えたりする事項を示唆し学習の方向を導くものであり、児童の疑問などを含むものである」とする。

① 地域資料の活用

児童にとって身近であり、意外性のある地域資料と出合わせることで、地域の事象への興味・関心を高める。児童があまり意識していなかった事象を提示することで、「どのような取組をしているのか」「なぜ取り組んでいるのか」という事実や理由を把握するための問いを引き出す。

② 調べる対象の焦点化

児童の問いを解決するために、「何を調べたいか」を明らかにさせ、調べる対象を焦点化させる。さらに、自分たちで調べたり話し合ったりしても解決できない地域の人々の思いに着目させることで、地域と関わる必要感をもたせ、「地域の取組を見に行きたい」「地域の人に直接話を聞いてみたい」という問いを引き出す。

③ 地域課題の明確化

保護者への意識調査や地域の人々の思いを基に話し合うことで、今まで気付かなかった地域課題を明らかにする。そして、「広野町をどのような地域にしたいのか」というイメージをもたせることで、未来の地域の姿を思い描かせ「地域のために自分たちにできることは何か」という問いを引き出す。

(2)【手だて2】地域の社会的事象を多角的にとらえさせる意見交流

多角的に考えるとは、「複数の立場や意見を踏まえて考えること」である。

① 地域人材との意見交流

児童が課題を解決する過程において、本やインターネット等で調べたり友達同士で話し合ったりしても、地域の課題を解決するまでには至らない。そこで、児童のニーズに応じて地域人材と関わることで、自分以外の人たちの取組や考え、思い等を多角的にとらえられるようにする。

② 児童同士の意見交流

調べて分かったことを基に、児童同士の意見交流によって学習内容を整理する。まず、同じ問いをもった児童との意見交流を設定することで、分かることを増やし、次に、異なる問いをもった児童との意見交流へと広げることで、複数の意見を参考にして、様々な立場から自分たちに何ができるかを考えられるようにする。

(3)【手だて3】地域への思いを込めた広野町物語づくり

児童が学んだことを「地域に伝える、未来に残す」という意識をもって学習に取り組めるように、広野町物語として表現し、累積していく。

① 自分自身の意識の変容を自覚させる学びの足跡の累積

児童に自分の学びの足跡を振り返らせることで、自分自身の意識の変容を自覚させ、「自分の考えを地域の人々に伝えたい」という思いを高めさせる。その際、地域のために自分たちにできることは何かを選択・判断できるよう、自分の考えを客観的に振り返ったり、友達と比べて考えたりすることで、伝える情報を整理させ、資料として蓄積していく。

② 自分の思いの発信

地域に対する自分の思いを身近な人に伝えることを目的とすることで、相手意識を引き出し、学んだことと社会生活とのつながりを自覚させる。さらに、「伝える人のために正確に調べたい」「分かりやすく伝えたい」「家族にも実践してもらいたい」という思いをもち、自分の学んできたことを基に、伝える内容をよりよく選択・判断できるようにする。

3 研究の実際

対象学年 第4学年22名（1学級）
授業実践Ⅰ「地震からくらしを守る」（15時間）
授業実践Ⅱ「残したいもの 伝えたいもの」（12時間）

本稿では、授業実践Ⅰの実際を中心に述べる。

(1)【手だて1】について

① 地域資料の活用

地震・津波の被害にあっても現在まで残っている地域の神社の写真の提示した。この神社が海の近くにあり、周辺の家屋が津波により損壊していることに気付かせることで、児童から「この神社は、なぜ残っているのか」という問いを引き出した。

そして、石垣により周辺よりも高くなっていることが分かると、「昔の人々が神社を守るために石垣を作ったのではないか」と先人の工夫を予想した。さらに、自然災害の現場や地域の防災訓練の写真の提示し、「人」に着目させたことで、自然災害から人々の命やくらしを守る取組への関心を高めた。こうして、広野町で生きる人々の自然災害に対する取組について、調べたり考えたりできる学習問題を設定した。

② 調べる対象の焦点化

学習問題の解決に向けて学習計画を立てさせたことで、児童から「家や学校ではどんな準備をしているのか」や「役場でも何か対策をしているのか」という問いを引き出した。各家庭での取組を話し合うと、個人の関心の差が大きく、家の人に聞いて正しく調べる必要感が高まった。一方で、役場の対策について児童同士で話し合ったところ、「役場の人に聞かないと分からない」「役場の人の話を聞いてみたい」という結論になった。こうして、直接関わって調べたいという思いを高め、「役場の人は自然災害に備えて、どんな対策をしているのか」という問いを引き出した。

③ 地域課題の明確化

家庭や役場等の取組について調べるだけでは、地域の人々の命を守るために何ができるかを自分事として考えるまでには至らなかった。そこで、防災意識の低下や町民の避難訓練への参加率低下という地域の課題から、地震や津波から命を守るための自助や共助の大切さを正しく理解させ、家族や地域の人に知ってもらいたいという思いを引き出すことが大切だと考えた。

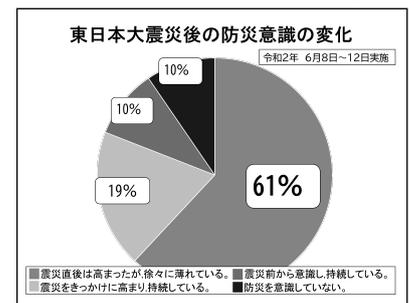


図2 保護者アンケートの結果

そこで、震災後の防災意識の変化について、保護者アンケートを基に防災意識の低下に気付かせた（図2）。

さらに、東日本大震災の津波映像を視聴したことで、再び巨大津波に襲われるのではないかという危機意識が高まり、「再び大きな地震が来たら、海近くの木（防災緑地）も流されてしまうかもしれない。どうすればよいか」という問いを引き出した。

(2)【手だて2】について

① 地域人材との意見交流

児童は、「災害から命を守るために、大切なことは何か」という問いに対して、初めは、自分の生活経験や家庭での備えを基に、「食料や水を備えておくことが大切である」という考えをもった。それが、役場の人と関わって調べたことで、「すぐ取れる場所に食料や水を用意する」という発言が見られた。これは、役場の人の立場に立って、素早く行動することの大切さを認識した上で、家庭でも配置を工夫し、素早い行動の大切さを自覚した考えである。また、冷たいご飯を食べて辛かったという避難者の声を聞いたことで「ガスコンロと水とフライパンでお湯を沸かして、アルファ米にお湯を入れて温かいごはんを食べてもらう」という相手の気持ちを考えた発言が見られた。これは、電気が使えなくても温かいごはんを食べさせたいという避難者への優しさから出た考えである。

このように、児童は、自助や共助の大切さを意識し、道具は使うときや使う人を考えて、何を用意すればよいのか、どのように保管すればよいのかまで配慮して考えた。

② 児童同士の意見交流

地域人材との意見交流を踏まえて、児童同士での意見交流を行った。「大切な備えは何か」について話し合う場面では、「けがした時のための救急箱が必要だと思う」「情報を集めるためにはラジオが必要」「乾電池も必要」という意見が出された。このような意見を学級全体で共有したことで、様々な立場から必要な備えをとらえ、実際に災害が起きた時のことを想定して考えることができた。

(3)【手だて3】について

① 自分自身の意識の変容を自覚させる学びの足跡の累積

単元の導入において、「地震や津波から人々の命を守るために、誰が、どんなことをしているのか」という学習問題への予想では、具体的な記述が少ないことから、自然災害への関心が低く、災害から人々の命を守る取組を自分事としてはとらえていない児童が多かった（図3）。

しかし、自分の家庭や学校での取組を調べたり、友達の家庭での取組を聞いたりすることで、自助や共助の大切さを自覚し、実践しようとする意識が生まれた（図4）。

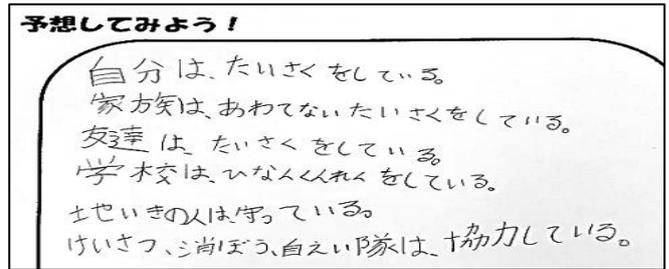


図3 災害に備えた取組の記述(予想段階)

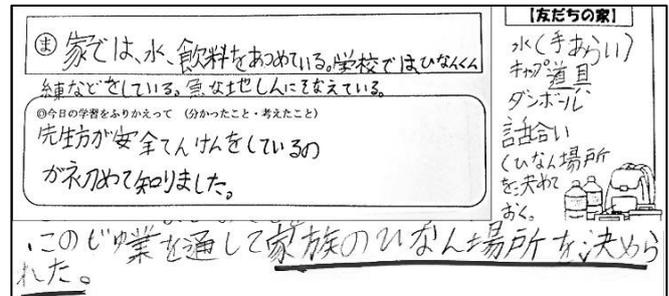


図4 災害に備えた取組の記述(調査後)

また、地域が推定9mの津波に襲われたという事実により危機感をもち、「もし次の地震がそれ以上の津波だったら防災緑地では守れない」と判断するに至った（図5）。

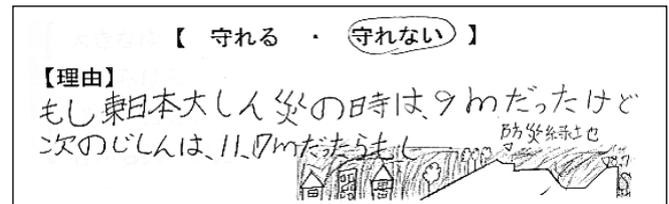


図5 津波からの避難を考える

このように、単元の学びを通して、地域の安全な暮らしを守っていくことを自分事としてとらえ、地域の人たちに素早い避難を呼びかけるなど共助の大切さを自覚することができた。

② 自分の思いの発信

児童は、相手意識をもち、災害への注意喚起や向き合い方をメッセージとして記述した。こうして、自助や共助の大事さを自覚し、自分たちの命を守るために大切なことを選択・判断して考えることができた（図6）。

学習したことを家族に伝えたことで、避難所等の再確認をするなど、実践に生かす児童の姿が見られた。

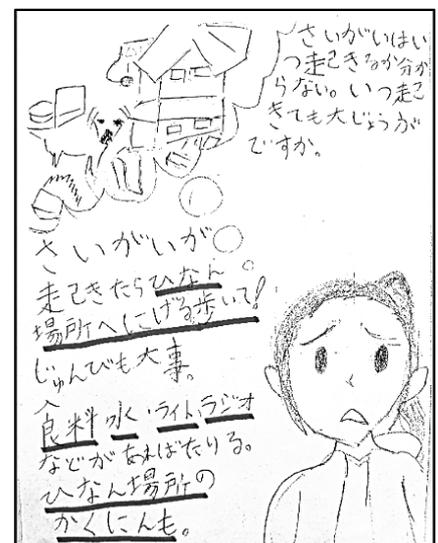


図6 地域へのメッセージ

Ⅲ 研究のまとめ

1 仮説の検証

(1) 手だて1の検証

意識調査の結果を見ると、「疑問に思ったことを地域の人と関わって解決したいと思いませんか」という質問に、「思う」と回答をした児童の割合は、6月の調査では41%であったのに対し、9月の調査では55%と伸びが見られた(図7)。意識調査の平均値の差に関するt検定を行ったところ、有意差が認められた($p < .05$)。

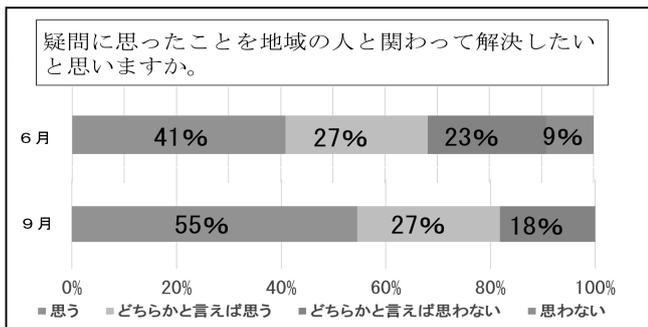


図7 意識調査の結果

つまり、地域資料やアンケート、映像資料等から地域についての問いを引き出したことで、地域と関わって詳しく調べたり、考えたりして解決する必要感が高まった。

(2) 手だて2の検証

児童の必要な備えへの認識が意見交流によってどのように変化したのか、テキストマイニング※2を用いて分析した。初めは、「飲料水」「食料」等、家庭での備えを基に考えており、児童から出された考えの総数は23語であった(図8)。一方で、地域人材と関わって、防災備蓄倉庫の備えを理解したことで、命を守るために「懐中電灯」「ガスコンロ」等の道具を使うことの大切さを自覚した。児童から出された考えの総数も152語と増加した(図9)。



図8 意見交流前の考え



図9 意見交流後の考え

ここから、備蓄品に関する知識量の増加だけでなく、備蓄品の役割を多角的にとらえられるようになったと推察される。役場の人や避難者等の複数の立場に立つことで、素早い避難を想定した配置の工夫や緊急時に使いやすくなる工夫について理解し、避難の困難さを軽減したり、安心感や癒しを与えたりする道具の役割に気付くことができた。

※2 文章から意味のある情報や特徴を見つけ出す方法

(3) 手だて3の検証

意識調査の結果を見ると、「学習したことを基に、地域をよくするために自分たちに何ができるか考えることができますか」という質問に、「ある」と回答した児童の割合は、6月の調査では41%であったのに対し、9月の調査では59%と伸びが見られた(図10)。意識調査の平均値の差に関するt検定を行ったところ、有意差が認められた($p < .05$)。

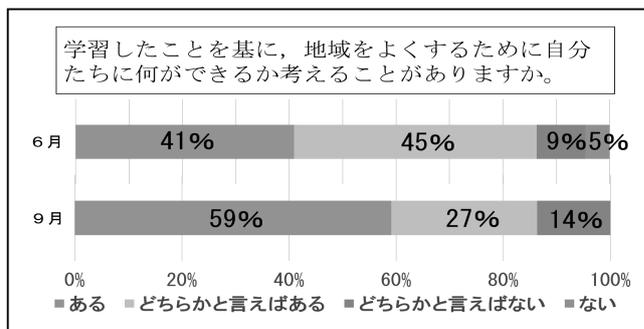


図10 意識調査の結果

児童から出された考えを分析すると、防災リュックの準備や備蓄倉庫の備え等、「災害への備え」を大切だと考えている児童の割合は77%、高台避難や避難場所・避難所への移動方法等、「災害への対処」を大切だと考えている児童の割合は73%であった。

つまり、児童の思考を言語化してきたことで、児童は、これまでの学びを基に、高台避難や各家庭での防災リュックの備え等、地域の人々の命を守るために大切なことを選択・判断して考えることができた。

2 成果と課題

(1) 研究の成果

- ① 広野町物語づくりによって、地域と関わって調べたり、考えたり、伝えたりする目的意識を明確にしたことで、地域と関わって問題解決するよさを自覚できた。
- ② 単元の学習を通して、自分にできることを選択・判断して考えてきた。その結果、「家族と避難方法を話し合って、安全に避難できるようにしたい」と発言する児童が見られるなど、学びを社会生活に生かそうとする態度を育んだ。

(2) 研究の課題

- ① 地域人材との関わりから、その人の取組や思いを理解できた。一方で、思いへの共感が高まり、教科としての学習内容の定着が十分に図れない場面があった。
- ② 「地域のために自分たちにできることは何か」という問いは、児童の発想が広がってしまう。そこで、さらなる話し合いを通して、焦点化を図っていく必要がある。